

第 42 号

医療法人財団 中山会

八王子消化器病院

消化器病専門医療機関・東京女子医大関連病院

日本医療機能評価機構認定病院

〒192-0903 東京都八王子市万町 177-3

TEL : 042-626-5111

www.八王子消化器病院.com

制作 (株) 教育広報社

八王子消化器病院ニュース

おおり

HACHIOJI DIGESTIVE DISEASE HOSPITAL NEWS



獅膽鷹目行以女手

八王子消化器病院 病院長 原田 信比古

桜の季節が終わり、新緑の風かおる季節となりました。当院は昨年創立30周年を迎え、その記念事業の一環として今春、病院玄関前に故羽生富士夫前理事長の顕彰碑を建立いたしました。羽生富士夫先生は昭和5年茨城県に生まれ、昭和29年千葉医科大学を卒業後、当院の初代理事長でもある中山恒明先生が開設された東京女子医科大学消化器外科教室へ赴任されました。その後27年の長きに亘って同教室の教授を務められ、多くの消化器外科専門医の育成に尽力されました。先生はまた、腹部外科では最大級の手術である膈頭十二指腸切除術の確立に大きく貢献した世界的外科医でもあり、日本消化器外科学会をはじめ多くの学会を主宰され、日本の消化器外科の発展に寄与されました。

顕彰碑に記されている「獅膽鷹目行以女手(したんようもくおこなうにじょしゆをもつてす)」は羽生富士夫先生が外科教師として、弟子の教育にあたりしばしば語られた座右の銘であります。獅子は獲物を捕る際、細心にして大胆且つその瞬間には全力を集中し、鷹もまた上空から微細な変化も見逃さない鋭い目で獲物を追い求め捕える。すなわち「医師たるもの診断においては鷹のよ

うな鋭い目と、治療にあたっては獅子のような強靱な心臓を持ち、手術や処置を行う際には乙女のようなしなやかな手をもって行わなければならない」ということを表しています。原文のドイツ語は「Ein Doktor muss ein Falkenauge, eine Jungferhand und ein Löwenherz haben.」(とつう言葉で、以前、羽生先生がその原典を求めて精査したところ、16世紀にジョンホールという人が書いたという説や17世紀トーマスマスファラーによって書かれたという説があり一定しなかつたようですが、医師の心構えとして時を超え、国境を越えてその精神が世界中に伝えられていったものと思われます。我が国ではおそらく明治時代にこの八文字に凝縮して意識され、現在に伝えられています。

医療技術が進歩して機器が診断し、また分子レベル・遺伝子レベルで治療が行われる時代になりましたが、最後に決断し実行するのはひとりの人としての医師であり、それは真剣勝負です。この言葉はひとりの患者様を前にしたときの医師としての心構えを鋭く且つ端的に表しています。また、単に医師にとどまらず、プロフェッショナルとしての技術を持つ人々への箴言でもあり

ます。当院の基本理念「患者様のための医療」の根底には、先人から伝えられてきたこのような医療の原点が脈々と流れており、これからもこの精神を引き継いで、地域医療に貢献して参ります。



羽生富士夫先生 直筆の書。左は病院玄関前に建立された顕彰碑。

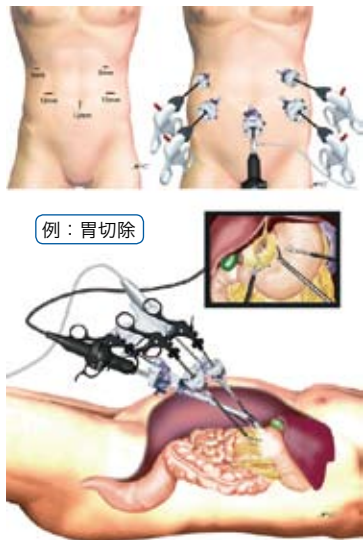


もっと知りたい!
身体 治療
病気の コト

腹腔鏡下手術について

八王子消化器病院 消化器外科 医師

君島 映



医療法人 山下病院より
(<http://www.yamashita-hp.jp/laparoscopy/about.html>)

例: 胃切除
1991年以降、腹腔鏡補

今回は近年メディアなどで話題になっている「腹腔鏡下手術」に関してご説明いたします。まず最初に「腹腔」とは身体の中の部位なのでしょうか? 「腹腔」とは「おなかの中」を指し、胃や腸などの臓器が納まっている空間を言います。もう少し分かりやすく説明しますと「身体」と言う大きな「水槽」の中に「臓器」と呼ばれる「内臓」を浮かべ、水槽の「水」にあたる部分(実際には水はなく、水が溜まると腹水と呼ばれ、多くの場合、病的な状態です)のことで、腹腔鏡下手術は腹部に5-12mm程の小さな穴を数箇所あけ、この腹腔の中に胃カメラの様な高性能カメラ(『腹腔鏡』や専用の電気メス、鉗子(かんし)という組織を挟んだり剥がしたりする器具などを入れて、テレビモニターを見ながら行う手術

のことです。最終的には切除した胃や腸を、おなかから取り出さなければいけないので結果的に3-5cm程度の傷が付きませんが、開腹手術と比較するとその差は明らかです。

◆腹腔鏡下手術の歴史

腹腔鏡の歴史は古く、1960年代に欧州で泌尿器・婦人科分野における診断に使われました。その後、その鮮明な映像をもとに、尿路結石などの治療に応用され、1978年にはドイツで自動気腹装置(腹腔へ炭酸ガスを送りおなかを膨らませる(気腹)装置)が開発され、腹腔鏡下で婦人科手術が始まりました。消化器領域では、1985年にドイツでの内視鏡下の胆のう摘出術が腹腔鏡下手術の始まりです。次いで1987年には手術の映像をビデオモニターに映しながら

の胆のう摘出術が行われました。執刀医と助手、看護師が視野を共有しながら、協力して手術を行う現在のスタイルを確立したのです。

日本では1990年に、初めて腹腔鏡下で胆のう摘出術が行われ、胃癌は

1991年以降、腹腔鏡補

助下で胃の切除が行われるようになりしました。現在、胃切除や大腸切除、胆嚢摘出など16種類の消化器系手術が保険適応となっております。

◆腹腔鏡下手術の利点

患者様側の利点としては、開腹手術で20cm程おなかを切開した場合と比較して、低侵襲(体への負担が少ない)手術であることです。傷が小さいことは、美学的に優れているだけでなく、術後の痛みが軽く早期の離床が可能であったり、呼吸機能障害(肺炎など)を減らすことができ、また、臓器が空気に晒されないため開腹手術と比べ、術後の腸管運動の回復が早く早期から食事ができます。これらのことから入院期間が短縮され、早期に社会復帰ができることなどが利点です。

一方、医療者側のメリットは、専用の高性能カメラで拡大した鮮明な画像を見ながら手術をおこなうため、従来の開腹手術では見えにくかった部位や細かい血管・神経までが見え(これを拡大視効果と呼びます)、より繊細な手術操作が可能となり出血量を軽減することが可能です。これは結果的には患者様の利益にもつながります。

◆今後の課題

現在、胆石の手術は腹腔鏡下手術がスタンダードな治療法ですが、今後は『胃癌』と『大腸癌』の手術についても盛んに行われるようになっていくと予想されます。実際、全国の胃癌手術の約20%で腹腔鏡下手術が行われています。しかし、

胃癌手術に関して腹腔鏡下手術と開腹手術を比較した場合、十分な手術経験を持つ施設においては安全性が証明されていますが、癌の再発率や生存率などを十分に検討した報告はありません。そのため、対象となる病気の状態を限定したうえで、臨床研究としての治療法とされており、今後はより大規模な研究展開が期待されます。一方、大腸癌に関しては海外の大規模な研究にて開腹手術に比べて手術時間は長くなりますが前述の利点があること、合併症発生率および再発・生存率は開腹手術と同等であることが報告されています。しかし、海外と日本との治療成績は大きく異なり(日本の治療成績の方が良好です)、日本での治療法を決定するには胃癌と同様に今後、日本国内で十分な検討が必要です。その他、腹腔鏡下手術では気腹するため心臓や肺への負担がかかり、心臓や肺の機能が低下している方では腹腔鏡手術による利点と気腹による欠点とを勘案して適応を決める必要があります。また、開腹手術と同様に高度肥満の方では手術が難しく、合併症のリスクは高くなります。また、過去の手術による高度の癒着が予想される場合には、腹腔鏡下手術が行えない場合もあります。

当院でも腹腔鏡下手術を積極的に取り入れつつありますが、病気の進行度・部位・既往症により腹腔鏡下手術が行えるかどうか更に詳細な検討を加えた上での判断になります。ご質問がありましたらお気軽に主治医にご相談ください。

ある花屋のたわごと

八王子市めじろ台在住
青木 純一さん



42

すべての物が明るく輝き一年で最も華やかな時季の春、その春をきれいな花々が彩ってくれています。私は、その花を長い間、商ってきました。

以前と違って、今の花屋の店先は、バイオとか抑制栽培とか促成栽培と季節感にはまことに乏しいが、きれいな花々が所狭しと竝んでいます。ドライフラワーを除いては、皆、生命を宿しているものばかりです。私は、それらを毎日、十年一日の如く淡々として、四季折々の興をそえて販売しておりました。

然し、私はこの時期の桃の花だけには格別の感慨をもっております。

花屋の仕入は年間を通じて、すべて市場に頼っておりますが、うちの店では桃の花だけは畑で育て、自分の手で剪り、温室に入れて寒さに強い丈夫な蕾をもたせ販売しておりました。市場物は、お客様が活けても満

足に咲いてこないのです。この仕事だけは私にとつて年に一度の生産から販売までの一貫した作業でした。実は、これが数も多く、日頃怠惰な私にとつては非常に辛い仕事だったので、父の代からのお客様に対する奉仕であり、他に無いわが店の自負だったので。

然し、私も引退して現在は営業の内容も変り、残念乍らそんな労力を使うことはやっておりませんが…。

当時をふりかえり、桃の木にしてみれば風雪に耐え、折角、花を咲かせる為に生きてきて、毎年の様に枝を切りとられ幹だけの裸にされ、一寸可愛そうなことだなと昼の辨当を使い乍ら畑の陽だまりで思ったりしたこともありました。

処がある年、仕事を始めようとした矢先に鉋で自分の腕を打ち、大怪我を負ってしまいました。

それから間もなくのこと、美術雑誌にこんな記事が載っていました。若き日の版画家の棟方志功が、野中の一本の桜を画いているのを一人の教師が学校の窓からみていた時のことです。志功は写生を終えたあと、その桜にふかぶかと礼をして帰って行ったとのこと。私は深く考えさせられました。

私のこの怪我也、きつと「桃の木 of 精霊」がこの愚かな私に生き物に感謝することを教えてくれたのか、若い時代の私の心にはまだ響かなかつたのだと反省しました。

それから以後、私は毎年一本一本の樹に対して、鉋をいれる前には必ずお礼の言葉をかけて仕事を始めることになってきました。

近年、すっかり植物を扱う仕事を離れて感じることは「本来、天災と云うものはありえないことと考えるべきが正しいのではないか」と。何故なれば、人間の勝手気儘な慾望により、自然環境の立場になって配慮することなしに、やり度い放題にやっつけてしまう。それが引金になって豪雨のこと、突然の地滑り、陥没などが発生する。文明人はこぞつて、その責任を他になすりつけようとする。文明は発展す



桃の花
けんらんひらく
今朝の春

雛まつり
おもひは遠き、
むかしかな

ここにきて
しばらくの春
桃の花

遠き日の
桃の節句や
あさき夢

純一

るが、人々の心は反比例して益々退化する。

遠く今より昔、二千五百有余年、仏教の始祖釈迦牟尼世尊は「末法万年」と申されて、人々の心に警鐘を鳴らさせておりました。

人間も大自然のひとつかけらの存在と気がついた時、釈尊は「宇宙即吾」とお悟りになりました。杜甫のあの有名な「春望」の詩には「国破れて山河あり、城春にして草木深し 時に感じては花にも涙をそそぎ、別れを恨んでは鳥にも心を驚かす」とあり

ます。私たち、自稱「万物の霊長」たるものその名に恥じない、お互い生きてゆく為には欠くべからざる「仁愛」の心を持つべきでありましょうか。

八王子消化器病院の先生方をはじめとする医療の世界に身を置かれる全ての職員の方々にも相通ずることと思います。

今年は、四十五年振りの記録的な大雪でしたが、ひ孫のお雛様の隣で桃の花はきれいに咲いてくれました。

放射線科のご紹介

放射線科 主席科長

大宮 満

放射線科は、責任担当医師の梶外科医長をはじめ、診療放射線技師 4 名、看護師 2 名、看護助手 1 名の合計 8 名のスタッフで業務を行っています。

当科には、胸部や腹部のレントゲン撮影を目的とした単純撮影室、胃透視や注腸検査を主に行う透視検査室、頭部・胸部・腹部等の CT 撮影を行う CT 検査室、さらに血管内治療等を目的とした透視検査室といった 4 つの検査室があり、患者様の治療・検査の内容に応じて検査を行えるような設備を整えています。これ以外にも、患者様の容態により病室や手術室でもレントゲン撮影が行えるようにポータブル撮影装置を 2 台保有しています。

胸部や腹部のレントゲン撮影(単純撮影)は、患者様の病状を把握する上で最も基本的かつ重要な検査の一つです。皆様も一度はお受けになったことがあると思います。胸部撮影では肺や心臓の状態、腹部撮影では腸のガスや便の状態を観察することができます。単純撮影は、他の検査や手術の前後に行うことにより、診断や治療に際して非常に役立ちます。

透視検査では、バリウム等を使用して大腸を撮影する注腸検査を中心として年間約 3,000 件の検査を行っています。特に注腸検査は短時間で精度の高い検査を行っており、その技術は患者様に対する放射線の被ばく線

量と苦痛を最少に抑え、近隣の医療機関からも高く評価されています。最近では多摩地域の診療放射線技師会で講演を行ったり、他院からの技師の実習受入れ要請もあります。

CT(コンピュータ断層撮影)検査は、最も有用な診断方法の一つです。当検査により体内の状態をスライス(輪切り)した画像にすることで客観的に観察することができます。また、造影剤を使用した撮影や通常のスライス画像だけではなく、様々な角度から観察できるようにコンピュータ画像を構築することができ、血管や胆嚢・胆管を立体的に表現した 3D 画像を作成することで、診断や手術に際し、より精度の高い情報提供をすることができます。

CT 検査における技術の進歩は著しく、最近では炭酸ガスを使用する大腸 CT 検査(仮想大腸内視鏡検査)を行う医療機関も増えてきています。当院におきましても、大腸内視鏡検査や注腸検査では体に負担が大きいと思われる患者様を対象に取り入れていけるかを検討しているところです。

これらの撮影検査の他に、主に治療を目的とした処置があります。黄疸を軽減するためのドレナージ(排液)術や内視鏡を使用して膵管や胆管を造影する検査などがあり、消化器疾患の専門病院である当院では日常的に行っています。また、食道や腸管、胆管の狭窄部位を拡張させることを目的とするステント留置術や食事を摂取できない患者様に対する栄養補給、抗がん剤を持続的に注入する目的で行うカテーテル留置やポートと呼ばれる器具を体内に留置する処置等も数多く行っています。

当放射線科では、以上のような確かな技術と診断は言うまでもなく、何よりも大切であるのは人と人との関わりであると考えています。患者様の中には、不安を持ちながら検査を受けられる方も少なからずいらっしゃることから、常に声をおかけし、笑顔で対応するように心がけています。検査をお受けになる際に不安なこと、ご意見・ご要望等がありましたら遠慮なくスタッフにお申し付けください。

今後も、患者様に安心かつ安全な検査をお受けいただくために、最新の知識や技術、装置を積極的に取り入れて少しでもお役に立てようスタッフ一同努めて参ります。



想うこと

『色気』、『色香』、『妖艶』と並べると「一体、何事か」と思われる方、思わずニヤリとされる方と人それぞれですが、実は桜の話です。

古来、日本人に愛され、花と言え桜とまで言わしめた桜。その桜には若木であっても他の花には無い『色気』があり、それが老木の桜となると、そこはかと無く『色香』さえもが漂ってきます。

す。更にライトアップされた夜桜ともなれば何とも『妖艶』な雰囲気醸し、心惑わせます。桜に気持ちりが浮き立つこの時季は、不思議な高揚感に溢れています。

大雪に泣かされた今冬ですが、病院脇の若桜は『楚楚』として咲いております。

理事 久野久夫

